

## あ と が き

春の息吹を求めて白杵城跡に車を走らせた。白杵城跡は桜で有名だが一角に梅林がある。梅は桜と違って多木よりもぼつんぼつんと立っている方が趣き深い。ほころんだ白梅にメジロが数羽、枝から枝へと跳ねていた。大分大学医学部の裏門から下に降りたところに東院の紅梅と白梅がある。ここには鶯がさえずりながら跳ねていた。春がそこまで来ている。新型コロナの鬱々とした世相の中で、それでも春を待つ我々日本人の深層心理はその姿にワクワクしている。考えてみれば丁度100年前、1918年に世界が今と同じようにパンデミック禍につつまれた。スペイン風邪だ。今ではありふれた知識の中に位置づけられるH1N1型インフルエンザウイルスの通称だ。当時は光学顕微鏡の時代でありウイルスという概念がなく、有名な北里研究所の北里柴三郎先生と国立伝染病研究所の長与又郎先生のインフルエンザワクチン競争（実はウイルスの概念が無かったため北里研究所はインフルエンザ菌、国立伝染病研究所はインフルエンザ菌と肺炎球菌他数種細菌の混合ワクチンであったといわれており）ともに的はずれなもので効果が乏しかったと言われている。当時は原敬が初の平民宰相となり大正デモクラシー全盛の時代であったため、明治時代のコレラやチフス蔓延期に政府が国民に行ったような感染者の強制収容隔離や商店閉鎖を行えず、また統制や警察権力の介入が難しかったためイラスト入りポスターの配布やビラの散布で国民の意識啓蒙という手法が用いられていた。日本の歴史を考えるとかなり斬新な衛生行政の変革と言わざるを得ない。現在の政府の対応は、このスペイン風邪流行時に形造られたと考える。埼玉県和光市にある国立保健医療科学院には「流行性感冒」という表紙で当時の全国の感染状況や地方自治体独自の取り組みが500ページにわたって総務省衛生課の職員によってまとめられている。地方自治体では北海道での女性達によるマスク増産運動や東京での貧困者に対する夜間予防接種所の開設など独自の工夫で懸命に取り組んでいたことが伺える。またその根幹に咳エチケット、マスクの装着、帰宅時のうがい手洗いなど、今と同じような励行がポスターを通して推察されている。当時の日本の人口約6000万人、感染者数約2400万人、致死数約39万人。現在と違い抗生物質も誕生していない時代であり、人工呼吸器もECMOも無い時代であるから細菌による二次感染もあり栄養状態も異なっていたため単純に比較できないであろうが、感染者数が全体の4割を超えたところでワクチンも無く2年半で終息している。かなりのパンデミックだったことは推察される。このことが起点となり14年後にウイルスの発見、19年後に全国保健所の設置の起点となった。このパンデミックには第一次世界大戦が伝播役にもなっていて戦死者よりも感染による死者が上回ったことから第一次世界大戦が早期収束したという側面も持っている。因みにスペイン風邪という俗称はスペイン発症ではなくアメリカ軍内発症とされているが、当時軍部はこの事実を発表すると士気に関わり、戦力分析に使用されるため公表せず、中立国であったスペインより情報が発信されたため、この俗称が広まったと言われている。我々が今なすことは4割の人間が抗体を持つ状態を作ること、すなわち高齢者へのワクチンの早期接種を完結することであり、医師会員は平生を取り戻すための労力を惜しんではならないと考えている。この原稿をしたためているとテレビからチェリスト宮田大さんとソプラノ歌手の森麻季さんのドリームデュオ「ジュピター」が応援歌のように流れてきて耳許に心地よい。

(編集委員 後藤 正幸)

## あ と が き

## COVID-19と医療従事者のメンタルヘルス

COVID-19パンデミックとメンタルヘルスについての研究は多数報告されてきています。あるメタ解析 (Cénat JMら, 2021) では, COVID-19パンデミックに影響された集団の有病率はうつ病 (15.97%), 不安症 (15.15%), 不眠症 (23.87%), PTSD (21.94%) と報告されており, 医療従事者では不眠症の有病率が有意に高いとされています。

本邦においてCOVID-19患者の治療に直接従事する日本赤十字医療センターの医療従事者848人 (医師104人, 看護師461人, その他の医療スタッフ184人, 事務職99人) を対象に, 不安症状 (GAD-7 $\geq$ 10点) とうつ症状 (CES-D $\geq$ 16点) を自記式の質問紙を用いて調査した報告 (Awano Nら, 2020) では, 中等度～重度の不安症が疑われる人が85人 (10%), うつ病が疑われる人が237人 (27.9%) と報告されています。特に不安が強く, 看護師はうつのリスク因子で, 年輩でレジリエンスの高い人はうつに発展しにくいという結果でした。

COVID-19患者を受け入れる医療機関の職員は当然のこと, クラスタが発生した医療機関の職員のメンタルヘルスも支援する必要があると考えます。クラスタが発生した状況では, 感染防御やPCR検査に関心が高まり, 各個人のメンタルヘルスまでは注意が向きにくいのではないのでしょうか。コロナウイルス感染への恐怖, 社会的な風評被害や差別から不安, うつ, 不眠など誘発する危険性が高いことが想定されます。まずは心身悪化の予兆をとらえるために定期的な心理学的評価を行い, 院内に相談窓口を設置してはいかがでしょうか。また, 十分な個人防護具の提供と休息, コロナウイルスを受け入れる医療機関やクラスタが発生した医療機関の医療従事者に対する社会的な差別や偏見の防止, 家族や同僚との対話による支援, アクセスしやすいカウンセリングなど心のケアの提供, オンラインを利用した精神医学的介入などの対策を実行する必要があると感じています。

(編集委員 帆秋 伸彦)

## あ と が き

## じり焼きの話

全国各地にある「道の駅」は、国土交通省により登録された商業施設と休憩場所を兼ねた設備で、大分県内には25か所ある。売店では主に地域の特産品や農産物を売っているが、時には近所の主婦などが昔懐かしい家庭おやつを作って売っていることもある。

先日、車で県南方面のある道の駅での事、店内を歩いていると年配の女性店員が持ち込んだおやつを並べていた。その一つが珍しかったので早速買ってみた。それは、小麦粉を溶いた生地を薄く焼き、それにこしあんを広げて巻いたものだった。焼いた生地はお好み焼きのようなもちもち感があるが、クレープのようにフワフワしていない。生地のもちもち感と少ないあんこの甘みと、そしてまだ少し温かいこともあったので美味しくいただくことができた。

容器のラベルでそれが「じり焼き」という名前である事を知った。調べてみると、豊後大野周辺から大分市内まで家庭で作るおやつの定番であり、いわゆる豊後大野地方のソウルフードだ。じり焼きの名前の由来は諸説あるが、生地が「じりい」（大分の方言で「ゆるい」）から来たそうだ。私の印象では、「じりい」とは雨などで道路がぬかるんでいる様子なので食べ物 の名称としてはなんだか気の毒な気もする。この形態のおやつは、「じり焼き」以外にも地域によって「おやき」「へこ焼き」等の別名があるらしい。一説によれば、あんこが入ったじり焼きは主流ではなく、元々は黒砂糖を砕いて生地に散らして巻き込み、熱で黒砂糖が溶けることで温かさと甘さが広がるという素朴なおやつであったそうだ。私は別府の人間だが、じり焼きの存在は知らなかったもので、県北までは広がっていなかったのかもしれない。

同じ県内でもおやつ一つを取っても地域差があるのは興味深い。しかし道路も整備され人々が行き来することも容易になっているので、それぞれの地域で静かに守られてきた昔ながらの家庭のおやつが、新しいお菓子の流通に押され、懐かしく珍しい物になってすたれてしまうのは残念だ。

今、全国的に新型コロナウイルス感染症（COVID-19）が広がりを見せている。本症がヒトーヒト感染で蔓延するので、感染の広がりを抑制するには人の交流を避け移動を抑制するしか方法は無いことは明白だ。かといって交通網が発達し人の交流や移動が容易な現代では、これを完全に止めてしまうのは困難だ。現代人は人や物の交流で多様性のある豊かな生活を得てきたが、一方で新興感染症の急激な広がりによる経済的打撃という負の面もあることを今回はひどく思い知らされてしまった。

（副編集委員長 吉賀 攝）

## あ と が き

今年、父親が亡くなった年齢を超えてしまった私ですが、もの心ついた時から西大分に住み、毎日の様に父の釣ってきた魚を存分に食べ、海から船で田ノ浦海水浴場に泳ぎに行ったり浜の市という秋祭りの最中に年をとって育ちました。

進学で親元を離れ、色々な価値観、環境、人に揉まれながら、自分らしさを掴んでいったかと思えます。

安全な場所で、ゆっくり周囲と接しながら、思いきり自分を発揮できてきたからこそ初めて知らない場所で、一からやっていけたかなとも考えています。

(こう書くと何事もスムーズに過ごせたかのようですが忘れてだけで親から見たらとんでもない親不孝な娘だったと思えますが)

…大分医大の頃は「親孝行の三振王」と言われてました。

他に、「ホームラン王」「フィルダースチョイス」と言われた人もいますが…。

今の情報社会は、便利に効率良く情報を得ることができ、コミュニケーションも可能です。アマゾンで買物し、あっという間に自宅に届けられた時は「こわい」位です。

(時々履歴を見ると重複していたり、びっくり！一人で家飲みしている時、サクッと買っていた！)

人間の身体能力を超えた情報社会のスピード、テンポとのギャップは年齢を重ねると辛い事もあると感じています。

今年はコロナ禍のもと、WEB会議、講演会、on line授業と入学後、学校で友人と会う事も少なく、ゴールデンウィークの旅行、里帰りもなく、夏祭り、秋祭り、運動会と人の集まる場が少なく、イベントが自粛され、春先から夏、秋、冬と気がつけば、2020年の終りの月となっていますが、一年を過ごした感覚が希薄です。

毎日、見えない何かと闘う恐怖を抱えたまま一年を終えようとしています。

子供達が生きている実感を、家族、友人、地域の人と集い交わりながら、感じられる日が早く来る事を祈るばかりです。

(編集委員長 貞永 明美)

## あ と が き

毎月の大分県医師会々報を楽しみにされていることと拝察いたします。私も手にするとまずは目次をザッと見て、その時々で読み始める順番はまちまちですが、すべての記事を隅々まで読んでいます。

会員からの寄稿で成り立つこの会報は、先生方の診療以外の面を知ることができグッと身近に感じられる貴重な情報源となっています。そして先生方の博識さ、見識の豊かさには常々感服する一方です。

今月号の「会員のひろば」には宮崎先生が『ナイチンゲール生誕200年に寄せて』を寄稿なさっています。この項を拝読してはじめてナイチンゲールが生誕200年を迎えることを知りましたし、ナイチンゲールの偉業やこの日を世界中で「看護の日」にしていることなどを詳細に理解しました。今まではぼんやりとした知識として持っていたものにしっかりと焦点が定まった思いです。

「郡市医師会だより」の津久見市医師会 小宅先生の『へき地巡回診療』も感慨深く拝読いたしました。各地で多くの先生方がご活躍なさっているであろうと認識してはいますが、こうしてご寄稿いただくことによって会員の皆様に広くお知らせできることは、何にも代えがたい意義あることであると思っています。

今後も多く先生からのご寄稿を心からお願い申し上げます。

(副会長 藤本 保)

## あ と が き

朝晩と少しずつ冷えるようになり秋の訪れを感じます。今年の夏は酷暑で外来にも熱中症の患者さんたちがたくさん来院され、またコロナ禍での印象深い夏でした。今後もコロナ禍が続くのですが、だんだんとコロナ禍にも慣れていくのも感じます。しかしながら感染症が増える冬場への対策はしっかり行い少しでも患者さんを助けるのは医療機関の責務と思います。皆思いは同じです。心を一つにして頑張っていきましょう。医師会としても行政と協力しながら対応を行い、また各医療機関を支援しています。行政にも更なる援助と協力を要請している状況です。

さて県医師会は本年6月に新しく体制が変わりました。どのメンバーもやる気があり有能な方々で大変心強く思います。コロナ禍で歓迎会や懇親会はご法度なのは例年と違いますし、いつも行われる会議や出張も中止や延期になりました。その分対応に追われていますが、良かったことはWEB会議の体制が飛躍的に進んだことです。今後も先が見通せず柔軟に対応するしかない状況ですが皆の知恵と力で何とか乗り切れると信じます。数年後に今回のコロナ禍への対応が評価されると思います。よくやったと評価されたいものです。

(編集委員 谷村 秀行)

あ  
と  
が  
き

糖尿病の女性患者が診察室から出るときに、「先生、どうぞ」と数個の飴玉を渡されることがある。本人の言い分は低血糖を起こしそうなときに舐めているそうだが、どう見ても緊急用というより常用なのだ。

子供の頃の駄菓子で飴玉といえばニッケ玉が定番で、駄菓子屋のおばちゃんは瓶から素手で摘まんで渡してくれていた。飴玉はとても大きく、おまけにニッケ成分が多くて辛かったので、私には少々持て余し気味であった。しかし安くて長時間味わえるニッケ玉は、駄菓子屋の買い物のわずかな釣り銭を使い切る目的に役立った。

同じ頃、祖母の家に行くと「ビガー」というキャンディを出してくれた。それはミルク味のソフトキャンディでニッケ玉に比べると大きさも手頃で柔らかく上品だった。口に入れるとニッケ玉よりはるかに短い時間で溶けてしまうのでたくさん食べることが出来た。何より祖母からもらうので小遣いが減ることはないし、数量制限もなかった。しかし最近は今全く見なくなっただけで、広島県に本社のある製造元がもう10年以上前に廃業したのだそうだ。真偽の程は不明だが、このキャンディは極めて歯にくっつきやすく虫歯には良くなかったのが市場から消えた原因という噂もあるようだ。

こんな駄菓子生活を送る私は当然のように虫歯少年だった。当時、乳歯はいずれ生え替わるので虫歯でも良いという考えが親たちにあっただけで放任されていたのだ。今では虫歯だらけの小児はむしろネグレクトなどの虐待を疑われるし、幼少期からの歯の衛生が将来にも重要であることは今では常識になっている。このように昔と今では考えが全く異なり、「昔の常識は今の非常識」という事は多い。

新型コロナウイルス対策は功を奏したのかわずかに光明が見えるようになったが油断は出来ない。ウイルス対策の各分野で色々な意見が錯綜しているが、ずっと後になって、どういう評価となるのか今は全くわからない。もしかしたらわずかに見えたこの光明もその後の第三波のプロローグかもしれない。だから我々は目の前にある問題を現在考えられている最善の方法で立ち向かうしか術はない。その中でもうエピローグであって欲しいと祈るばかりだ。

(副編集委員長 吉賀 攝)

## あ と が き

4月号のあとかぎで新型コロナウイルスの世界的流行について、感染対策、周囲の状況、生活の変化など書かせて頂いた。文章の最後には「春うららの季節。四季を感じられる日本、世界を取り戻せる日の来る事を信じたい。」とある。

あれから4ヶ月が経過し、緊急事態宣言は解除されたが大都市を主に全国各地域での感染状況はとても収束に向かっているとは思えない。経済状況が逼迫し違う意味で生死にかかわる状況もあり、一筋縄ではいかない難しい局面にもきている。人々が集う場面はまだまだで、私の大好きなJリーグが再開したことは嬉しいが夏祭りの始まりの長浜さまも中止。地元のお祭りの浜の市も早々に中止の知らせ。娘の楽しみにしていた花火大会も。毎年浜の市の最中に年を取る私だが、今年はスルーかなんて。

教育現場も大変。大学の先生はオンライン授業の準備に必死だし、短い夏休みにとまどい、県外に出た大学生がオンライン授業で家に戻り昼夜逆転生活をしているのを心配したり、ご飯作りに追われてストレスがたまり愚痴半分、診療半分の患者様も多い(当院は婦人科なので・・・)

人々の暮らしを彩ってきた歴史ある行事も次々と中止となり、社会生活の中で人と関わりながら一日が暮れていく(暮らし)の情緒も中々感じにくい。もちろん粛々とした生活の中でも発見はある。

幼稚園に通いだした2歳9か月の孫は、母親に促されながら「バイキン、バイキン」と言いながらアルコール消毒するし、「バイク、バイク」と言いながら手洗いも上手にする。先生ってすごい!

マスクに覆われたままいつの間にか季節はもう盛夏。

娘たちと出かけた郊外で、車の中から蝉の鳴き声を聞いた。

皆「あっ蝉!」と。季節はしっかり息づいていた。

(編集委員長 貞永 明美)

あ  
と  
が  
き

先日、野津原の原村と吉熊に蛍を観に足を運びました。毎年この時期には蛍を求めて大分県内を探索します。夕暮れの時期に現地に着いて暮れゆく中で光を待つときの時間がとても楽しみです。もともと花や自然、生き物にはあまり興味がなく、休みといえば自分で体を動かしてスポーツをすることしかしてきませんでした。還暦が近くなる頃から四季にまつわる花や生き物、旬の食材、自然に興味が湧いてきたのは妻の影響でしょうか。これまでも近くは庄内、湯布院に蛍を観には行ったことがありましたが、5年前に宇佐市院内町定別当の上院内小学校下の院内川流域で観たおびたしい蛍の光がきっかけで、この季節は年替わりで九重宝泉寺温泉や安心院の矢津にも足を運び楽しんできました。昨年、野津原の原村の蛍を観に行った際、大分川ダムの完成でかなり蛍が減っていることを知り、同じ野津原の吉熊の蛍を観に足を伸ばしました。吉熊は道路沿いに車を駐めて約1kmほど歩きますが、光の乱舞を観るためならいといません。蛍の光はルシフェリンの緑色で呼吸をするような強弱をもって点滅し、飛ばば線状を作ります。この地の蛍はほとんどが源氏蛍で幼虫の時はカワニナしか食べず、成虫になってからは何も食べずわずか数日間しか生きません。只次世代の生殖のためだけに時間を過ごすといえます。飛び交う光が美しく儂く美しいのは、そうした理由があるからかと改めて感心させられます。蛍狩りの時期には決まって「あじさい」が花を咲かせています。野津原のあじさいは青い花が多いように見受けました。その土地の土壌が酸性であれば青色が強くなり、土壌がアルカリ性であれば赤色が強くなるそうです。リトマス試験紙の逆です。野津原の土壌は酸性ということですね。今年は早春からの新型コロナウイルスの影響で、耶馬溪の桜も奥別府の桜も十分な鑑賞が出来ず、九重のみつまたも宇佐の藤の花も観ないまま過ごしました。四季を感じながらその季節の味、色、匂い、風を感じながら過ごす一年間、繰り返しながら年を重ねてきたつもりでしたが今年ではできません。2020年はとても寂しい一年になりそうです。

気を取り直して先週末、6月最後の週末に妻と2人で南海路のリアス式海岸をドライブしました。蒲江まで自動車道で行き、海岸線を北上して津久見の上浦まで走りました。夏の海と入り組んだ入江、浮かぶ小島、素晴らしい景色の中、「塩湯」というひっそりと立つ食事処に着くと、県を越えた移動制限が解除となったからか駐車場には福岡、鹿児島、宮崎、佐賀といった県外ナンバーの車が多く停まっていて混んでいました。食事の時間待ちを利用して海水を沸かした露天風呂に入り雄大な海岸線を背景にゆったりとした時間を過ごしました。海鮮丼と海鮮焼きで海を満喫した後、津久見に向かう道中から新型コロナウイルスも治まっていないこの時期に、不謹慎ながらふと南海沖地震が頭をよぎりました。こんな素晴らしい土地を津波が襲ったら……。立場上縁起でもない妄想をして、そのための病医院連携やバックアップ体制を本気になって作り上げておかないといけないと考えたとき、車のスピーカーからソニー・ロリンズのテナーサクソがセイント・トーマスを奏でて耳元を初夏の風が通り過ぎて行ったのでした。

(編集委員 後藤 正幸)

## あ と が き

## こんな時には読書三昧

新型コロナウイルス感染流行の影響で、例に漏れず当院も患者が激減し、暇に任せて読書三昧の毎日です。疫病が世界史の流れをどう換えたのかは過去の巻頭言やあとがきですでに御紹介しましたが、今熱心に読んでいるのがこのような最悪の状況の時の理想的な指導者はどんなタイプかと言う事です。

先生方は現在の状況下でアメリカのトランプ大統領、中国の習近平国家主席、ロシアのプーチン大統領そして日本の安倍首相の指導力についてどのような評価をくだしていますか。

戦争の時もそうですが、このような非常事態に対して今の政治家達に任せておいて大丈夫なのでしょうか。又、心身症を含め、慢性疾患を有していた場合に戦争の始まり時や止め時の判断もそうですが、冷静な判断が出来るのでしょうか。

そのあたりを含め私のお奨めの書籍は「指導者が倒れたとき」、「世界史を動かした脳の病気」、「主治医だけが知る権力者」です。結構おもしろいですよ。

(副会長 織部 和宏)

追伸

6月で副会長から県医師会の監事になります。よって公的な立場で巻頭言やあとがきを書くのは今回が最後となりました。先生方、くれぐれも御用心、御自愛なさって下さい。お元気で！

## あ と が き

## イカ天の話

ここで言うイカ天とは和食のイカの天ぷらではなく、ビールのおつまみとしてコンビニなどで普通に売られているイカ天（またはイカフライ）のことだ。広島ではお好み焼きや焼きそばのトッピングとしても人気だそうだ。

のしイカに小麦粉などの衣を付けて揚げたもので、メーカーによってふわふわと柔らかいものから煎餅のようにパリパリとした食感のものまで多彩である。味は昔からの定番である甘辛味から最近では激辛味の製品もあるようだ。私が子供の頃は近所の駄菓子屋で売っていた記憶があるので結構昔からあったようだ。

さて、昔からのイカ天好きの私は色々な製品を食べ比べてきたが、最近ある製品にたどり着いた。それは大分市内の某スーパーの鮮魚売り場の片隅で売られているイカ天だ。これはソフトタイプだが、完全なソフトタイプではなくて、クリスピーな食感をわずかに残すイカ天だ。独特の風味は濃いめなのでたくさんは食べられないがビール派にはお好みだろう。ただし健康志向の方々には塩分摂取過多や過酸化脂質の観点からお叱りを受けそうなので、あくまで自己責任でお試しいただきたい。

実は、このイカ天、私が子供の頃は「母の禁忌食品」の一つであった。当時は現在のように一つ一つパッケージに包まれておらず、大きな瓶から手づかみで取り出して売っていたので、母の「不潔食品クライテリア」に抵触していたのかもしれない。しかし誘惑に弱い私は禁忌指定があると食べたくないので隠れて時々買い食いしていた。

世間は新型コロナウイルス対策で混乱している。集団での感染を防ぐために外出や集会の自粛が叫ばれているが、報道で夜の歓楽街の様子を見ると未だに徹底しているとは言い難い。自粛は自己責任のレベルでは無く集団を守るための数少ない方法の一つなのだが、ここに来て個人自由、自己責任を言う人たちがいるのは残念だ。

関係各位の尽力に感謝するとともに国民も協力し、一刻も早い収拾を目指したい。

(副編集委員長 吉賀 攝)

あ  
と  
が  
き

新型コロナウイルス感染の世界的な流行は、これまでに経験した事のない状況にあり、毎日不安と緊張の中で生活している。この文章を書いていた日も、著明な芸人の志村けんさんが新型コロナウイルスの感染による肺炎でお亡くなりになった。頻りにTV等で元気な姿を見ていた人が突然いなくなる。この状況の怖さが若い人にも感じられたのではないだろうか。感染源を必死に追っていたが、都市部は感染源を追えない陽性患者が多数となり、大阪、東京、福岡と大都市での「不要、不急での外出」を控える要請が首長より出された。

また若年の感染者も次々報告されている。(3月下旬の時点で)

小さいお子さんのいる患者様が「不安でしょうがない」と涙をみせたり、大きな企業に勤める人は毎日の検温の報告と、勤務後の行動を時系列に記録したものの報告書の提出を課せられていて大変と愚痴ったりと、診療の合間にも色々な事が見られる。新年度の体制は・・・新学期は・・・今は刻々と変化する事態を見据えウイルスとしっかり闘わなければ。

3月の始めに自宅で転倒し、大腿骨骨折で入院し、手術後リハビリ中の母の顔も1ヶ月近く見ていない。差し入れと洗濯ものを持っていき、受付で病棟から降りて来てくれる看護師さんに渡し、様子を聞く。看護師さんも仕事が増え大変そう、もどかしいが医療崩壊はなんとしても防がないと。30日に94歳になった母にケーキと桜の花(もちろん布製の)とカード「孫や、ひ孫、娘より」を届けた。

看護師さんはケーキも快く許してくれて、カードも「私が読みますね」と言ってくれたそう。忙しい中に本当に感謝です。

別れと旅立ちの季節に区切りのセレモニーが見送られる事も多い。

やはり患者様で東京で建築関係の専門学校を卒業したけど、不安でとりあえず大分に帰ってきた、就活はまだ考えられないと言っていた人もいた。

逼迫した状況が生活の根本を脅かしていて、まずは「人の命」を何としてでも守るための対策を全力で模索し、検討し、実行している。

欧州で活躍しているサッカー選手も、(イタリア、スペインなど)インスタなどで今の欧州の現況を他人事でなく、家において！と若年層に訴えかけてくれている。毎日次々と悲観的情報の方が多くある今、自分のできる事をやるしかない、気持ちを奮い立たせている。

本来なら春うららの季節。四季を感じる日本を、世界を取り戻せる日の来る事を信じたい。

(編集委員長 貞永 明美)